

IV. 高等部

1. 高等部研究の経緯

1) 前年度までの研究経緯

本校では、令和3年度より知的障害特別支援学校における教科の授業づくり研究に取り組んでいる。昨年度の学部研究では国語について、学年を超えた学習グループを編成し、単元計画の作成、および授業における学習評価に取り組んだ。評価機会の一つとして、生徒の発言や振る舞いを付箋紙で文字化し共有することで、生徒自身が学習成果を実感し、授業に向かう態度に良い変化が生じることが明らかになった。また、育てたい資質能力の3観点の評価について、ルーブリックを用いることで、基準が明確になり、より妥当性の高い評価ができた。さらにルーブリックに設定した基準は、次の授業での目標設定に活かされたことが成果として挙げられた。一方、単元の評価規準毎に基準表を作成するためには、評価計画の作成に関するシステムの検討が必要であることが課題として挙げられた。さらに学習集団については、「教科内における縦の積み重ねと、教科横断的な指導のどちらも実現し、教育活動全体を通じて資質・能力を育てていくためには、生徒の実態を最もよく把握し、個別の指導計画を立案する担任が授業を担当すること（学級単位での取り組み）が有効である（筑波大学附属大塚特別支援学校, 2022）」とされ、他教科の学習においても、集団の人数や実態、学習内容に応じた授業形態を検討することが課題として挙げられた。

2) 今年度の取り組み

(1) 高等部研究方針

昨年度までの研究経緯および、全校研究の方針を受け、今年度の高等部研究では、下記の3点に取り組んだ。

- ①高等部社会科の学習で育みたい力の検討
- ②高等部社会科の単元配列表（年間指導計画）の作成
- ③知的障害のある生徒の学びを支える社会科の授業づくり

(2) 高等部における社会科の取り扱い

図IV-1に今年度の高等部の週時程を示した。昨年度の研究を受け、今年度の社会科は、各学年における学習集団で行った。年間35時間で指導計画を作成し、週時程を調整しながら授業を実施した。

	月	火	水	木	金			
1 8:30~9:20	日常生活の指導 (身支度・朝学習・朝のHR等) 運動タイム・自立活動 *スマイル・発育測定(月1回)							
(5)								
2 9:25~10:15	1年 国語	2年 数学	3年 社会	外国語	1年 国語	2年 数学	3年 理科	特別活動 全校集会/ 学部集会/ 委員会
(5)								
3 10:20~11:10	1年 数学	2年 社会	3年 国語	職業	1年 数学	2年 理科	3年 社会	総合的な 探究の時間
(5)								
4 11:15~12:05	1年 社会	2年 国語	3年 数学	職業	1年 理科	2年 社会	3年 情報	家庭
昼食 12:05~12:55	日常生活の指導 (身支度・食事等)							
(10)								
5 13:05~13:55	1年 理科	2年 理科	3年 理科	美術/音楽	1年 社会	2年 情報	3年 国語	保健体育
(5)								
6 14:00~14:50	日常生活の 指導(身支度・振り 返り・帰りのHR)			美術/音楽	1年 情報	2年 国語	3年 数学	職業
(5)								
7 14:55~15:20	日常生活の指導(身支度・振り返り・帰りのHR)							
下校時刻	14:20	15:20	15:20	15:20	15:20			

図IV-1 高等部週時程

(3) 社会科の学習で育みたい力

社会科の学習で育みたい力を考える基礎資料として、「高等部の授業づくりの方針」を検討した。

- ①今の生徒の現状、②授業での良い姿、③他者から教えてもらったこと、④これからの生活に関わ

ること 卒業時に知っておいてほしいこと の4つの視点から付箋紙にキーワードを書き出し、学習指導要領の目標、内容と照らし合わせながら整理をした。そして本校教育目標、高等部教育目標、学習指導要領における小学部から高等部までの学習内容のつながり、高等部の授業づくりの方針から、高等部社会科の学習で育みたい力を下記の2つとした。

①社会的事象を学ぶ中で、身近な生活との関連に気づいたり、果たすべき役割を考えたりすることで社会を構成する一員となる自覚を養う。

生徒の学びの実態として、自らが体験したことのある事象や、生活に身近な事象について、積極的に参加できる様子が見られる。各生徒が世の中の出来事である社会的事象を、「他人事」としてではなく、「自分ごと」として、置き換えて捉えられるようになること、そのための力を身につけることが重要と考えた。また身近な生活との関連に気づく方法や手段を身につけたり、自分にできることを考えたりすることで、役割の意識、社会の一員としての自覚を持ってほしい。

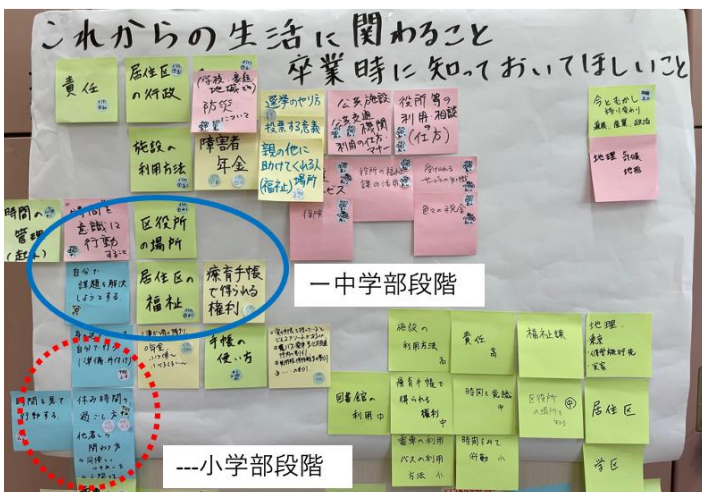
②選択したり、決定したり、解決したりする経験を積み重ねる中で、思いや願いを達成するためには、様々な方法や過程があることを知る。

学校教育目標の中に、生徒自身の「思い」や「願い」を大切にしながら、社会・文化への参加をめざすことが記されている。高等部段階の生徒が持つ「思い」や「願い」を、実現し、達成するために必要な方法や手段は、決して一つではないこと。目的を達成するためには、様々な過程があることを知ってほしいと考えている。

(4) 単元配列表

①単元配列表の作成手続き

社会科の単元配列表の作成にあたり、「高等部の授業づくりの方針」の中で、「④これからの生活



図IV-2 整理した付箋紙

に関わること 卒業時に知っておいてほしいこと」に主眼を置き、出された付箋を一つずつ学習内容に照らし合わせた。特別支援学校に加え、小学校、中学校の学習指導要領の目標や内容を押さえながら、各付箋の内容がどの教科の内容に関連するかを話し合った。社会科を中心とした教科横断的な視点で見ると、職業、家庭、道徳、保健体育（保健）の内容に、付箋が当てはまり、各教科の単元配列表に付箋の内容を反映させた。また、付箋の中には小学部、中学部段階に相当する項目（小学部、中学部段階で身につけておいてほしいこと）も含まれていた(図IV-2)。

こうした学びの連続性を意識して各学部が連携して単元配列表の作成に取り組むことで、高等部3年間におけるより深い学びにつながるであろう。

②単元配列表（令和4年度版）

今年度の社会科の単元配列表を、図IV-3に示す。

社会参加、社会参画への繋がりを大切にしながら、高等部3年間の積み上げを意識し、時間数などを考慮して内容の精選や配列を試みた。また、教科横断的な視点から、学校行事（特別活動）等とも関連づけながら作成をした。単元配列表を基に、単元計画を作成した。その際、学習指導要領高等部

社会科の内容と、各単元で扱う学習内容の対応について確認をしながら、単元計画を作成した。単元計画の書式や内容については、2. 授業づくりの実際で記載をする。現在、各単元において実施した授業を振り返り、取り扱う内容や題材、配列についての検討と改善を行っている。

高等部社会科 単元配列表										R4 年度																												
月	4				5				6				7				8				9																	
週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26												
授業研等																																						
行事		入学式			新	款			現	場	実	習												始	業	式												
社会科	社会1年				東京都の様子				関東地方 様々な地域と結びつく人々の暮らし										47都道府県から1つ 調べてみよう						新聞を作る 都道府県調べ													
社会科	社会2年	我が国の歴史 単元まで修学 旅行と関連あり			九州地方(地理) 自然と共に生きる人々の暮らし				九州地方(地理) 長崎県について										長崎の建造物を調べよう						新聞を作る 長崎の建造物調べ													
社会科	社会3年				情報通信産業				日本の産業と物流、貿易										郷土資料館調べ 地域の産業						新聞を作る 郷土資料館調べ 地域の産業													
月	10				11				12				1				2				3																	
週	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53											
授業研等				授																協																		
行事								修	大				終							協																		
社会科	社会1年				我が国の歴史 ゴミの今と昔				居住区の福祉 公共施設の利用										群馬県 上州富岡地方						私	た	ち	の	暮	ら	し	と	日	本	国	憲	法	
社会科	社会2年	我が国の歴史 単元まで修学 旅行と関連あり			我が国の歴史 熊本：防災対策と防災意識 長崎：外国との繋がり				国の政治の仕組みと 選挙										日本の世界遺産・ 文化遺産							日	本	の	資	源	エ	ネ	ル	ギ	ー	と	電	力
社会科	社会3年				我が国の歴史 明治維新・文明開化と横浜港				私たちの生活と政治 権利と義務										我が国の歴史 富岡製茶場と絹産業遺産 群							世	界	の	未	来	と	日	本	の	役	割		

図IV-3 単元配列表

(5) 知的障害のある生徒の学びを支える社会科の授業づくり (校内授業研究会：10月)

校内授業研究会では、高等部3年「我が国の歴史 明治維新・文明開化と横浜港」の授業について、オンラインと対面のハイブリッド方式で参観した。また研究協議では高等部社会科の学習で育みたい力と授業づくりのプロセスについて校内に提案をした。事後アンケートの質問1「主体的な学び」では、ICT 機器を含め生徒の理解を深めるための資料の作成や提示といった「授業づくり」、「教材教具の工夫」についてのコメントが寄せられた。また質問2「指導と評価」については、ルーブリックを用いた個別の学習評価といった「評価方法」「指導案の工夫」についてのコメントが寄せられた。また研究講師からは、「学習問題から予想、調査とまとめの授業の流れは、小中学校社会科とも共通しており、問題解決学習として徹底されていた」、「年表による対比を行う取り組みが理解を深めている。繰り返し行うことで定着化していくと考えられる」など知的障害特別支援学校における社会科の授業の可能性や特徴について、助言をいただいた。また、「児童生徒が身につけた見方、考え方を働かせながら、次の学部や段階の学習をするというイメージでつながりを表現する」、「限られた時間の中で社会に出た際に必要となる学習内容を選択して取り組むことがポイント」といった、学級間、学部間の学習の積み重ねや、学習内容の全体像の検討といった課題が明らかになった。

(文責：若井広太郎)

2. 授業づくりの実際

1) 高等部社会科3年の授業実践

I. 単元計画

学部・年/組	教科等	時数(想定)	実施時期	作成者
高等部3年	社会科	10時間	1月～2月	山口裕紀子

1. 単元名

我が国の歴史 富岡製糸場と絹産業遺産群

2. 単元の構想

(1)	学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	新しい発見に楽しさや喜びを感じ、疑問を解決することで達成感を持って学習に取り組む生徒が多い。問い掛けに、自分が持っている知識を活かして発言したり、友達の意見を参考に考えを述べたり、提示した物から選択したりと8人の表現方法は様々ではあるが、社会的事象に向き合い、自ら考えようとする姿が見られる。
(2)	学習活動・教材 (単元・題材観)	明治政府の取り組み(廃藩置県・地租改正・国会開設・内閣総理大臣任命・殖産興業)に着目し、これまでの時代との変化に気づくことができるよう資料や道具などの具体物を提示したり、体験活動を取り入れたりする。富岡製糸場や携わった人物から我が国の近代産業について知り、野外調査を実施し、建築の工夫や道具、技術の開発など官営模範工場として全国へ伝播していったことについて理解を深める。
(3)	単元の意義・展望 (指導観)	世界遺産である富岡製糸場や関係ある人物から社会的な事象を捉えるようにする。野外調査活動(富岡製糸場見学)を通して製糸場の広さ、建築の工夫、器械など現地の様子や実物を観察し、資料からは読み取れない情報を集める。製糸業の変化、それに伴う世の中の様子などを考え、意見を出し合うなかで、開国後、経済や文化を発展させてきたことが現代へと繋がっていることに気づけるようにする。

3. 単元目標(単元全体に関わる内容)

単元を通して目指す子どもの姿		
富岡製糸場や絹産業遺産群を学習する中で、日本の近代産業が発展していく基礎となったことを知り、先人たちの知恵と工夫により築き上げられてきたことに気づくと共にかけがえのない宝物として未来へ伝えていこうとする気持ちを培う。		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
③④ [オ(イ)ア] 高等部1段階・2段階	⑦⑧ [オ(イ)イ] 高等部1段階・2段階	⑩⑪ [ウ] 高等部1段階・2段階

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
1	明治政府の取り組みについて知ろう	2	・明治政府がどのように世の中のしくみを整えたのか、廃藩置県、国会開設、大日本帝国憲法の発布などの事象を知り、グラフ資料や錦絵、紙幣などの具体物を扱いながら変化を捉える。また伊藤博文を題材に、初代内閣総理大臣に任命されたことや憲法を作る仕事などに尽力したことについて知り、現在の政治へと繋がっていることに気づき、自分の考えを述べる。
2	富岡製糸場見学	1	・富岡製糸場や操糸場の広さ、建築の工夫、器械などの実物を観察、測定し、動画や写真に撮る。
3	富岡製糸場新聞を作ろう	7	・①～③について製糸場に携わった人物などを扱いながら、資料やグラフを読み取る。また相互の関係などについて考え、クラスで意見を交換する。毎時調べたことについては、ロイロノートや模造紙の「富岡新聞」にまとめていく。①富岡製糸場の敷地、建築の工夫について②繰糸器、労働条件などについて具体物を用いて実験したり体験したりしながら理解を深める。③質の良い生糸をたくさん作る技術を開発したことやその技術を広めた絹産業遺産群について理解を深める。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度
③我が国の歴史上の主な事象を手掛かりに、関連する先人の業績、優れた文化遺産などを理解している。 ④我が国の歴史上の主な事象を手掛かりに、世の中の様子の変化を理解するとともに、関連する先人の業績、優れた文化遺産を理解している。	⑦世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して我が国の歴史上の主な事象を捉えたり、世の中の様子の変化を考えたり、表現しようとしている。 ⑧世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、我が国の歴史上の主な事象を捉えたり、世の中の様子や変化を考えたり、表現しようとしている。	⑩社会に主体的に関わろうとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土に対する愛情、我が国の歴史や伝統を大切に国を愛する心情、我が国の産業の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚や平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きることの大切さについての自覚を養おうとしている。

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数:A 概ね妥当 B 要検討()	目標設定:A 概ね妥当 B 要検討()
題材:A 概ね妥当 B 要検討()	教材・環境設定:A 概ね妥当 B 要検討()

(1) 単元の概要

高等部3年生は、卒業後それぞれの思いや願いを実現するために進学、就職をし、社会へと巣立っていく。様々な人が集まって共同で生活していく環境の中で、社会を構成する一員として、役割を担うためには、国土、産業、公民、歴史、外国の様子などについて知ることや理解を深めておくことが大切である。これらの社会的事象に興味を持ったり、関心を抱いたりすることで、様々な事象が生徒たちにとって少し身近なこととして捉えられるのではないだろうかと考える。明治以降の日本は、交通、通信手段の発達、産業構造の変化によって急速に発展した時代であり、現在の生活に大きな関わりをもっている。様々な資料を通して情報を収集することで私たちの現在の世界にまでつながっていることに気づくことができる。そこで特別支援学校学習指導要領高等部オ（イ）を取り扱い「我が国の歴史 明治維新・文明開化と横浜港」、「我が国の歴史 富岡製糸場と絹産業遺産群」を学習することとした。時代の流れを掴むために一部通史を扱っているが、道具の変化や歴史上の人物、文化遺産を主な題材として学習を計画した。「我が国の歴史 明治維新・文明開化と横浜港」における授業内容、「我が国の歴史 富岡製糸場と絹産業遺産群」における授業展開、指導と評価、生徒の様子について記すこととする。

高等部3年生は、特別支援学校高等部学習指導要領の高等部1段階、2段階の目標で構成しているが、一部中学部段階の目標を取り扱う生徒、一部小学部段階の目標を取り扱う生徒と様々な実態の生徒が在籍している集団である。全体的に社会的な知識の量が少なく、自分の生活に関わりの少ない事象については、その事象について捉えたり自らの考えを表現したりすることは難しい。しかし、どの生徒も新しい発見に楽しさや喜びを感じ、疑問を解決することで達成感を持って学習に取り組むことができる。また、友達の発言を聞いて、自分の考えに生かしたり、協力して物事に取り組んだりとお互いの存在を大切にしながら学校生活を送っている。本単元に関わる高等部3年生の生徒の実態、本単元で目指す姿の一部を以下に示す（図IV-4）。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度	本単元で目指す姿
生徒● 高等部1段階 一部 中学部段階	関東地方の1都6県の位置については、地図を確認することで所在地を伝えようとする。社会的事象について、漢字から想像し、教師からの解説を聞くことを楽しみにしている。歴史上の人物に興味を持っており、自ら進んで功績などを資料から読み取ったり、気づいたことなどを記したりする。	グラフの増加や資料などを読み取り、事象の変化に気づこうとする。印象に残った言葉などを自分なりのイントネーションに変えて覚えようとする姿が見られる。社会的な事象を身近な生活に置き換えることで、自分が持っている語彙を用いて自分の考えを伝えようとする。	先人の業績や文化遺産に興味を持ち、学習の中で見たことや聞いたこと、感じたことなどを体で表現する事が多い。またこれらの経験を元に教師からの問いかけについて考え、意見を述べようとする。	自分たちの学習だという自覚を持ち、問われていることを自分で解決しようとする。富岡製糸場見学をきっかけとして明治時代の建築や労働環境、製糸器械に興味を持ち、自ら調べて考えるなかで、先人の知恵や工夫によって築き上げられてきたことに気づこうとする。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度	本単元で目指す姿
生徒● 高等部1段階 一部 小学部段階	土地利用図の色から海と陸についての違いを理解している。具体物を提示することで、感じたことや多少などの発言をし、傍にいる教師と意見を共有しようとする。	実体験を含む学習や、印象に残った内容については、見たことや感じたことを素直に表現し、話をする姿が見られる。生活の中で見聞きしている物は問いかけに対して、自分から前に出てきて具体物を指差したり、選択したりすることができる。	資料の提示、問いかけ、選択肢などを明確に示すことで、積極的に学習に参加する。友達と一緒に調べたり、話し合い活動をしたりすることを楽しみにし、自分のできることをやり遂げる姿が見られる。学習の中で印象に残ったことについては家庭で家族に何度も話をし、振り返っている。	資料などを対比した時に同じこと、違うことを見つめる。富岡製糸場見学をきっかけとして明治時代に興味を持ち、教師と一緒に調べたり考えたりする。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度	本単元で目指す姿
生徒● 高等部1段階	お城や人物など歴史に興味関心が高い。新しい知識を得ること、より深く学ぶ事に喜びや楽しさを感じ、学習中にも感じたことや考えたことを積極的に発言する。学校で学習したことを家庭で説明したり、再現したり、関連するものを調べて施設見学に出かけるなどしている。	地理、気候、これまでの学習内容などを関連させて自分の考えを述べる事ができる。また友達の意見を参考に、補足する、改めるなどと柔軟に物事を考えたり、取り組んだりすることが増えてきた。新しく学んだことを生かして、予測したことを発表することもある。	様々な事物に関して疑問に思うことが増えてきており、休み時間に調べる姿が見られる。家庭では、ICT機器を使って調べた場所へ実際に出かけ、見たり、嗅いだり、聞いたり、食べたりと五感を働かせて体験したりしている。調べてきたことについては、教師や友達と話題にすることが多く、他教科の学習と繋げて考えたりしている。	既習を活用して問題解決を図る学習経験を積む。社会的な事象についての問いと予想をどのようなポイントで調べるか解決するのかが術を知る。富岡製糸場見学をきっかけとして明治時代の建築や労働環境、製糸器械に興味を持ち、自ら調べて考えるなかで、先人の知恵や工夫によって富岡製糸場や絹産業遺産群が築き上げられてきたことに気づこうとする。

図IV-4 高等部3年社会科実態表

「我が国の歴史 明治維新・文明開化と横浜港」における授業内容

三次、12時間の単元計画で学習を行った。本単元を通して、近代化に伴う生活様式や日本社会の変容と現在の私たちの暮らしとの繋がりについて考察を深める中で、歴史に対する関心を高め、現代社会における日本のあり方や私たちの身のまわりの物の価値や意味について理解し、これからの生活を送ってほしいと考えた。一次「道具の今と昔について」では、私達が生活の中で使用している電話・扇風機・電球・鉛筆といった道具の起源について、一時間の学習の中で一項目を取り扱い道具年表に整理してきた(図IV-5)。手作業と機械の違いについて体験・体感をし「いつ」、「どこで」、「誰によって」、「起こったのか」などの観点をもとに予想をしたのち、生徒それぞれが資料から読み取り、事象を確認することとした。社会的事象に関する情報を収集するなかで、私達が日常使用している道具が明治時代から始まっていることや、道具の発明者が外国人であり、開国を契機に外国から日本に入ってきたことを資料や道具年表から読み取れるようにした。教材の工夫としては、生徒の実態に合わせて資料を作成したことや、道具年表に示す各時代区分の色を変え、時代の長さを捉えやすくした。学習した項目ごとに時代や人物を整理したり、



図IV-5 道具年表



図IV-6 地域産業の今と昔

発明した人たちの国を国旗で添えたり、当時の道具の写真を生徒と確認しながら貼り付けた。学習を進めるなかで、品質、生産量、人力、機械化、工場などのキーワードを取り入れ、産業の発達により利便性や生産性が高まっていったことに気づくことができるようにした。また、高等部3年

生は夏休みに居住地域の郷土資料館で調べ学習に取り組んでおり、自分たちが住んでいる地域の昔と今について見学し、江戸から明治にかけて栄えてきた産業について調べてきた（図IV-6）。一次での学習を踏まえて、地域の移り変わりや、産業の移り変わりなどの学びを深めることとした。二次「開国による生活・文化・貿易の変化と特徴」では、開国後、技術革新が進み、鉄道や蒸気船、電信が発達したことや郵便、学制などの仕組みが整っていったことを歴史上の人物を取り上げながら学習した。東京、貿易の窓口として栄えた横浜がどのような変化を遂げていったのか、錦絵の資料から街や人々の様子を紐解けるようにした。また明治の日本と欧米などを比較したり、道具年表で道具が発明された時期と日本に入ってきた時期を整理して時系列で表したり、発明者を追ったりする中で「文明開化」という社会的事象を理解できるようにした。三次「横浜を訪ねよう」は、横浜市の地理、歴史について資料を基に学んだことを、現地での観察や調査を通じて具体的な理解を深める機会を設定した。神奈川歴史博物館では、解説ボランティアの方から歴史資料の解説を聞き、自分なりに解釈をして学習してきたことと繋げようとする姿がみられた。シルク博物館では、次单元で取り扱う「我が国の歴史 富岡製糸場と絹産業遺産群」の前段階として蚕を見たり、糸繰り体験をしたりする中で、生糸ができるまでの過程を知ったり、繭糸の細さや繊細さを実感したり、機械で糸繰りされる様子を見学したりした。

「我が国の歴史 富岡製糸場と絹産業遺産群」における授業展開

本単元は、代表的な事物を取り上げながら学習を進めた。一次では日本の政治の移り変わりについて学習する中で、現在への繋がりに気づける機会とした。二次では、野外調査活動を実施し、問題解決に必要な社会的事象等に関する情報を収集することとした。三次では、建物、働く人たちの工夫、絹産業遺産群といった題材から昔の人々の知恵や工夫によって築き上げられてきたことや現在へと繋がっていることに気づいたり、理解を深めたりすること、また文化遺産にも着目し、自分の余暇の充実へ繋げるきっかけとしたり、これからの生活に役立つ内容になるように計画をした。

【座席・授業の流れ】

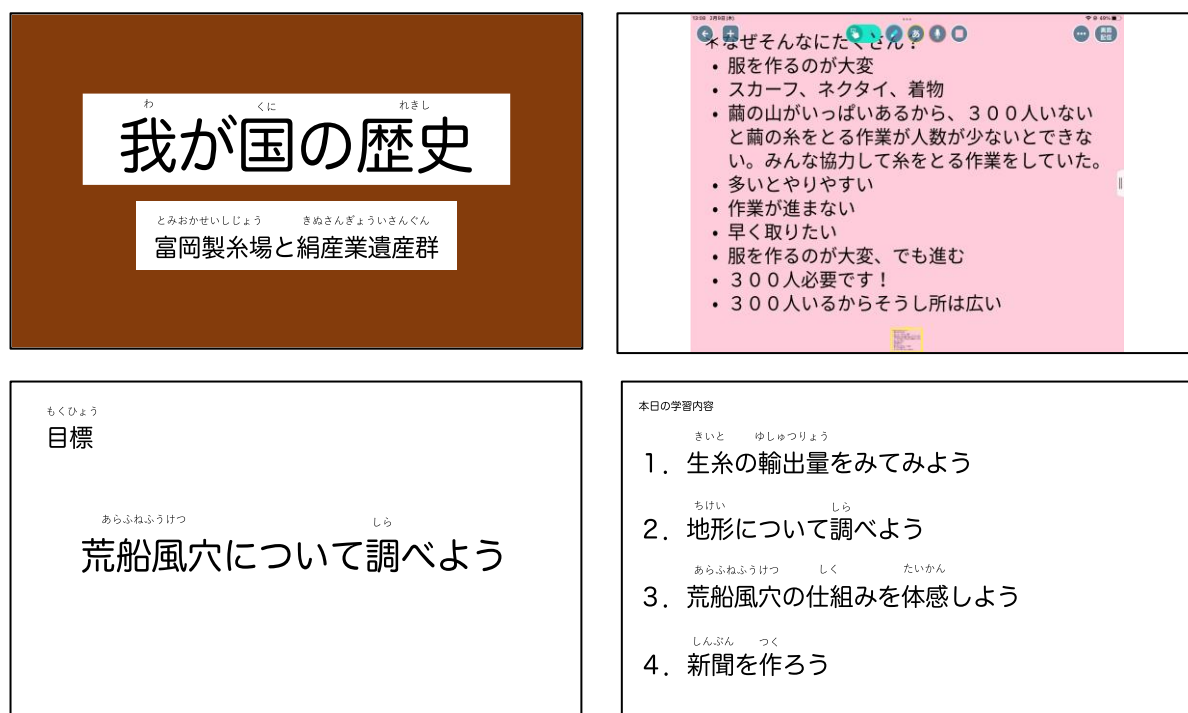
提示した資料や教材が見えやすい座席配置とした。資料を読み取る際には教室前のボードに大きな資料を掲示すると同時に、生徒それぞれの端末でも見ることができるようにし、掲示した物、タブレットのどちらからでも資料を読み取れるようにした。また自分の意見を自由に発言できる雰囲気作り、友達と意見を交換できる場の設定を行った（図IV-7）。



図IV-7 授業に参加する生徒の様子

【導入】

導入時に単元名を毎時モニターに映し出し、学習の始まりを意識できるようにした。また単元名のスライドの背景は道具年表に示した時代区分に合わせた明治時代を想起できるような配色にしている。前時の振り返りでは、前時の活動写真や生徒からの発言をまとめたスライドを提示しながら進めることとした。振り返り後は、本時において何を学習するのか学習活動のポイントを整理して提示し、生徒自らが目標と学習内容を確認してから授業を行うことができるようにした(図IV-8)。



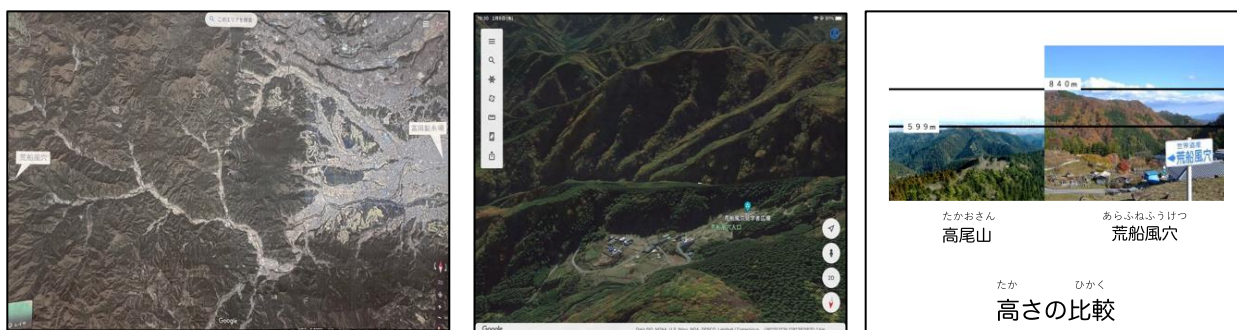
図IV-8 学習前の確認事項

【社会的な事象を捉えるための教材】

本単元では、3つの仕掛けを準備した。第1がその日や小単元の核となる学習内容に関することを体験する機会を積極的に設定した。体験活動を取り入れることで経験したことと事実が結びつき、さらなる興味関心へとつながると考えた。教師は、体験活動から出てきた生徒達の気持ちを言語化したり、視覚化したりしながら適切な言葉を伝え、事実を伝えることとした。第2に一人1台の端末を用意し、生徒から出てきた疑問が解決できる環境を整備した。多くの情報から問題を解決することが難しい生徒もいるため、生徒の実態に合わせた資料を準備すること、疑問を解決する方法や手段を支援することとした。また、難しい社会的事象については、教師から生徒へ伝えることで、新たな知識として知ることにも必要であると考えた。第3は個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るまとめの時間の設定である。生徒各々が調べたことを自分のタブレットにわかりやすく視覚化してまとめたり、教師がクラス全員の調査結果を並べて表示することで調査結果に関する知識を比較したり、広げたり、深めたりしながら学習を進めるようにした。

3次「富岡製糸場新聞を作ろう」の実践における具体例を示す。

荒船風穴がある甘楽郡下仁田町の地形の特徴について、Google Map と Google Earth を活用しながら捉えることとした。まず、2D の Google Map 航空写真表示からその地域の地形について予想し、意見を出し合った後に、3D の Google Earth で地形の高低差や山なのか田なのか畑なのかを視覚的に示しながらより詳しく読み取った。山の高低差については、生徒達がこれまでに登山経験のある山を比較することでより具体的な理解へと繋げるようにした（図IV-9）。



図IV-9 社会的な事象を捉えるための教材（地形）

富岡製糸場の東置繭所、西置繭所、繰糸所といった建築物については、野外調査活動を実施し、問題解決に必要な社会的な事象等に関する情報を収集することとした。東置繭所の建物の長さ、窓の数、煉瓦の組み立て方、煉瓦に記された会社名などをウォーキングメジャーやカウンター、方位磁石、万歩計で測定したり、アクションカメラ（Crosstour 社 CT8500）で撮影したりするなどして調査をした。西置繭所では建物の内装を見学し、柱に番号が記されていたことや労働者のサインやコメントが書かれていたことを調査した。繰糸所では、建物が建っている方角について方位磁石を用いて確認をした。機械の数を数えたり、窓の大きさについては、AR を活用した計測アプリ（SONICMOOV 社 measuAR）を用いて測定したりした（図IV-10）。



図IV-10 社会的な事象を捉えるための教材（建物）

野外調査後は、調査活動での様子を動画で振り返るとともにアナログ教材を用いて富岡製糸場の建物の仕組みや工夫について理解を深めることとした。繭は乾燥させておかないといけないことを知識として伝えた後に、窓の数が多き建物と少なき建物に風を当てることで風の通り方について実験を行った。置繭所としては、窓の多さが大切であることを考えるきっかけとなった。また、窓が大きく数の多き建物と窓が小さく少なき建物内の明るさについて比較確認を行った。電気が無い時代に太陽の光は貴重なものであること、陽の光を長時間、大量に取り入れやすくするための建物の方角、窓の大きさの工夫について、道具年表を用いて、時代背景を確認しながら考えていくことでより深い学びへと導くこととした。東置繭所の木骨煉瓦造については、模型を用いて生徒同士で積み方を相談しながら学習に取り組んだ。生徒が積み上げた積み方と本来のフランス積みを比較することで150年が経っても顕在する根拠を示すこととした。荒船風穴では、自然の力を借りて冷蔵することに気づけるように、荒船風穴の装置を作成した。直接冷風を触ったり、温度計で測ったりする体験を設定し、荒船風穴の自然の仕組みとそれを活用して先人が作った冷蔵施設とを示すことで昔の人の知恵や工夫に気づけるようにした（図IV-11）。



図IV-11 社会的な事象を捉えるための教材（アナログ教材）

（2）他教科との関連

社会科の学習の中で、社会的な事象に付随する事物などについては、国語や理科などの他教科において単元を設定して学習することで、様々な角度から、その事象に至るまでの経緯を知ることができ、より深い学びとなると考える。本単元でいうと、生徒たちは風穴というものを日常の生活の中で、目にしたり、手に取ったり、体感することがないことから、詳しくは理解していないであろうことが予測された。これまで地層の学習は行ってきたが、その仕組みを生活に利活用する事例までの学習内容は取り扱ってきていない。火山岩等が見られる荒船風穴の地層を理科で学習することで冷気の出る仕組みについてより理解できたと思われる（図IV-12）。また、荒船風穴以外の風穴が日本各地にあることなども知ること、それぞれの興味関心が広がっていくと考えられる。国語科の視点では、富岡製糸場の創設に携わった渋沢栄一の生涯について国語で伝記として取り扱った。様々な角度から総合的に学ぶことで、教科横断的と言える。社会科で学習したことを特別活動や総合的

な探究の時間、道徳と関連づけ、体験活動を実際に行うことで、知識が定着し、より深い学びへと繋がっていきっかけとなった。卒業に向けた総合的な探究の時間に取り組んだ「生き立ち」の学習単元、理科「蚕の育ち」の導入場面で見られた事例を記載する。小学部から在籍する生徒が、「小学校時代の思い出」として、小学部5年生の時に生活科の学習のなかで取り組んだ蚕の飼育について写真をもとに発表を行った。理科では、小学部の時に生徒自身が作成した蚕の育ちについてのペーパーパートを披露しながら発表を行った。発表を聞いた中学部以降に入学してきたクラスメイトが羨望の眼差しを向け、自分も育ててみたいと興味を持ったり、小学部で得た知識を高等部での学習の中でも生かせることが嬉しいと家庭で保護者に話す姿があったりするなど、本人の学びだけでなく、クラスメイトの学習の深まりや広がりのおかげになった。学習を積み重ねていくことの大切さを感じた場面であった。



図IV-12 理科「冷気の仕組み」
学習の様子

(3) 指導と評価

・毎時ロイロノートを活用し、授業展開、事象に関する資料や動画をスライド形式で提示した。また、授業中の生徒の発言をテキストカードに入力し、一覧やベン図で示すことで、自分の意見を授業中に即時振り返って再認識したり、友達の見解との共通点・類似点、差異に気づけるようにしたりした。また、発言したことは尊重し、表現が十分ではない場合は、生徒の思いを教師が代弁することで、語彙の幅が広がるようにした(図IV-13)。

これは、生徒がいつでもどこでも、その日の授業を振り返ることができるツールであり、学習してきたことの記録である。また、教師にとっては、記録に残す評価となっている。

・生徒の視点として、生徒自身が何を学ぶのか学習のポイントを授業の導入時にわかりやすく簡潔に伝えることで、目的を持って学習に参加できるようにした。

・考え方を述べたり、情報を活用したりする経験がこれまで少なかったことから、考え方や情報を活用する方法を提示したり、調査結果を整理してまとめたり、発言する道筋を示すなど調べ学習の進め方について指導した。

・グラフや錦絵、地図などの資料を読み取る際には、読み取りを始める前に教師が読むポイント、比較するポイントを提示した。資料を読み取る活動は、単元の中で繰り返し設定した。また、提示する資料は、生徒が他の教



図IV-13 振り返りに活用する
テキストシート

科で学んだ技能を活用して読み取れるものにすることや、強調したい部分が伝わりやすい形式に作り替えたりした。

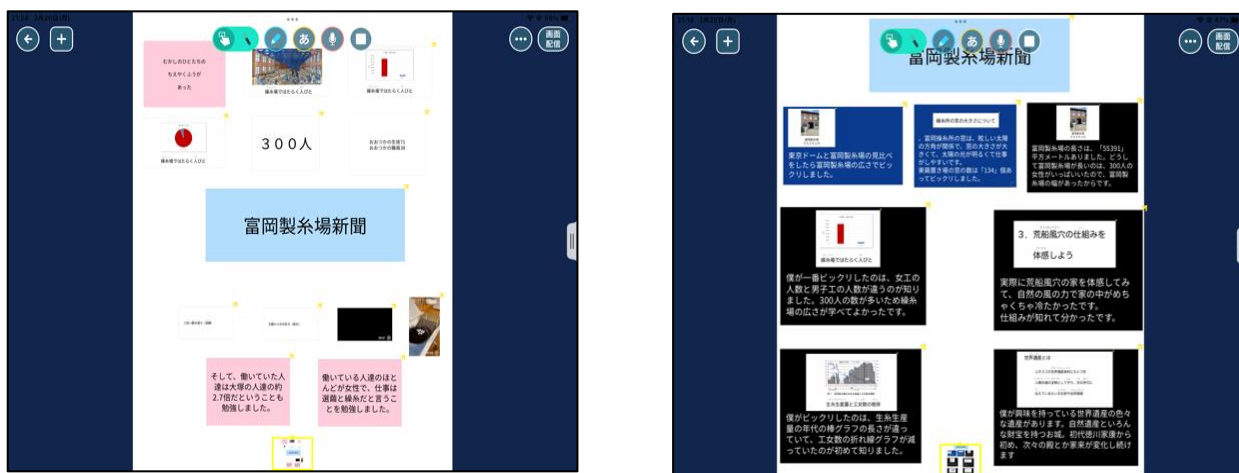
- ・ネットで検索したり、書籍から資料を読み取ったりするのが難しいと思われる時代背景、歴史的な出来事や変化が起きた理由など、生徒の持つ社会的知識などが十分ではない事象などについては、教師が新たな知識として伝えることで考える一助となるようにした。

- ・発言は尊重し、表現が十分でない場合は、生徒の思いを教師が代弁することで、語彙の幅が広がるようにした。

本単元、三次は学習のまとめとして「富岡製糸場新聞」を作成する時間を設定し、学習内容を振り返ることとした。毎時学習したことの中から気になったこと、驚いたこと、分かったことなど生徒それぞれが興味を持った内容に関して感想や考えを添え、社会的事象をより身近なものとして捉えられるようにした。また、できあがった新聞を見せ合うことで友達と思いを共有し、その授業を再度振り返れるようにした。ロイロノートは家庭でもログインできるようにしており、生徒と保護者が学校での活動や様子についてロイロノートを介して共有できるようにしている。

評価については、小單元ごとに評価規準に基づいて活動内容に照らし合せ、評価を行うこととした。一次は、生徒の発言を書き留めたロイロノートテキスト、生徒が社会的事象を読み取り、書き込んだ資料、授業の様子を撮影したビデオを基に評価した。二次は、調査活動の様子を評価した。三次は、生徒の発言を書き留めたロイロノートテキスト、生徒が社会的事象を読み取り書き込んだ資料、授業の様子を撮影したビデオ、富岡製糸場新聞を基に評価した（図IV-14）。

(4) 生徒の様子



図IV-14 富岡製糸場新聞

①指導場面

学習が始まる前に、「今日は何について学習するのかな。」「ロイロノートを見れば分かる。」「あ〜まだ今日の内容がロイロノートにない。」など社会科担当に聞こえるように生徒同士で会話をし、始まりに期待を持つ姿が多く見られた。学習の展開スタイルをほぼ同一にしていたこともあり、学習が進むにつれて、時代の名称が出てくると年表を確認したり、資料が提示されると前に出てきたりと生徒自らが進んで学習に参加し、これまで学んだ手法を活かして問題を解決しようとする姿が見られた。また、書字が苦手な生徒がいたため、プリントに書き込むワークシートという形式ではなく、ロイロノートのテキスト資料にチェックをつけたり、自分の考えを録音してテキストに貼り付けたり、キーボードで打ち込んだり、手書きで書いたりするなど生徒の実態に合わせて取り組むこ

とができるデジタルシートを活用した。

②その他の場面

歴史の学習を始めて以降、歴史上の人物や歴史の学習の中で使われる用語が家庭で家族との会話の中に出てくるようになったこと、これまで学習してきたことを単語で説明していた生徒が、学習を積み上げていく中で、伝えたい内容が分かるまでになったことなどを面談や連絡帳で保護者が伝えてくださることが増えた。点であったバラバラの知識が生徒の中で線となって少し繋がってきたようである。また学校で学習したことを家庭で話をしたり、調べたりすることでさらなる疑問が生じ、長期休暇に家族で現地に赴いたりする生徒も出てきた。「我が子の興味関心の種を蒔いてくださる学校」という表現をいただいたこともある。これまで、知らなかったことを知る、社会的事象をもとに考える、社会の仕組みについて触れる機会となったと思われる。

歴史という抽象度が高い学習内容であったが、見方・考え方の切り口を変える、体験してから考える、実際に触ったり、作って考えたりする教材を工夫する、伝えきれない事象については動画教材を活用するなど生徒の実態に合わせて学習を進めることで、興味関心を持ち、自分たちの生活と照らし合わせ、身近に感じることができるようになってきたのではないかと考える。しかし、自分たちの生活に置き換えて考えるという視点までは迫ることができなかった。

(文責：山口裕紀子 石飛了一 澁谷高伸)

2) 高等部 1 年の授業実践

学部・年/組	教科等	時数 (想定)	実施時期	作成者
高等部 1 年	社会	8 時間	1 月～2 月	若井 広太郎

1. 単元名

上州富岡地方について

2. 単元の構想

(1)	学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	仲間関係に関心の高い生徒が多い。また、校外学習や修学旅行といった体験的学習への興味関心が高い。一方、聞くこと、読むこと、書くことといった基本的な学習について、各生徒が課題を持つ。また数名の生徒は、テレビやインターネットのニュース等から社会的事象について関心を持ち、他者と共有をしようとする。また郷土の食べ物やご当地キャラクター、歴史ドラマなどに関心の高い生徒がいる。
(2)	学習活動・教材 (単元・題材観)	群馬県の中から、雪の生活体験(宿泊学習)で訪れる富岡市に焦点を当て、地形、気候、農業、について学習する。地形は、地図や航空写真、Google Earth などの複数の道具を手がかりに、富岡市の特徴(山、川、町、畑など)について、生徒自身が発見したり発言したりできることを重視する。また気候については、雪の生活体験で経験したことと関連づけながら、写真、動画を用いて各地域の特徴(雪、からっ風)を学ぶ。産業については農業(下仁田ねぎ、こんにゃくいも)を取り上げ、実物なども用いながら特徴をつかめるようにする。学習で印象に残ったことについて、文字、画像、音声、イラストなどを使って、ロイロノートにまとめる。
(3)	単元の意義・展望 (指導観)	1 学期から触れてきた地図や Google Earth 等を手がかりに、位置や地形に関心を持ち、気づいたことや考えたことを表現してほしい。社会科で学習した農産物の特徴等の知識を、家庭科の調理実習に活用するなど、教科間のつながりを生徒自身にも気付けるよう、指導したい。

3. 単元目標 (単元全体に関わる内容)

単元を通して目指す子どもの姿		
群馬県(片品村、富岡市)の自然(地形、気候)と産業(農業、養蚕業)の特徴について知る。 富岡市の地形や気候、農業について、調べたことや気づいたことをまとめて表現する。		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
① オ(ア)の高等部1段階	② オ(ア)の高等部1段階	③ 1段階

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
1	上州(群馬県)の地形と気候	2	<ul style="list-style-type: none"> 上毛かるた(つる舞う形の群馬県)から群馬県の形についてイメージを持つ。 関東地方における群馬県の場所(東京との位置関係)を大判地図で確認する。 群馬県の気候:片品村と富岡市の写真や気温図を比較し違いを見つける。
2	富岡市について調べよう(地形や農業)	6	<ul style="list-style-type: none"> 大判地図を用い、東京の位置と対応付けながら、富岡市の位置を全員で確認する。 東京から富岡市までの移動方法について意見を出し合い、移動距離や所要時間から場所のイメージを持つ。 拡大航空写真を見て、富岡市の地形、土地、建物などについて気づいたことを言葉で表現する。 富岡市の有名な農産物(下仁田ねぎ)について、白ネギと比較し、特徴を言葉で表現する。 富岡市の様子(川、山、道路、鉄道など)について、大型地図に書き入れる。 富岡市について調べたことや体験したこと(富岡製糸場、鐺川、妙義山、こしね汁)について、ペアで役割を分担し、資料(写真、文書)を用いて記録を作成し発表する。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 我が国の国土の地形や気候の概要を理解するとともに、人々は自然環境に適応して生活していることを理解しようとしている。	② 地形や気候などに着目して、国土の自然などの様子や自然条件から見て特色ある地域の人々の生活を捉え、国土の自然環境の特色やそれらと国民生活との関連を考え、表現しようとしている。	③ 社会に主体的に関わろうとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養おうとしている。

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数:	A 概ね妥当	B 要検討()	目標設定:	A 概ね妥当	B 要検討()
題材:	A 概ね妥当	B 要検討()	教材・環境設定:	A 概ね妥当	B 要検討()

(1) 生徒の様子

①指導場面（二次「富岡市について調べよう」）

二次「富岡市について調べよう」では、「雪の生活体験」で訪れた富岡市に焦点を当て、富岡市の位置、地形、農産物などについて学習をした。富岡市の位置を学習する際に、まず関東地方の大判地図を見て、群馬県をクラス全員で探して確認した。一次で群馬県の形や位置について学習をしたこともあり、地図を指さして見つけることができた。次に実際に訪れた富岡市を同じ地図で探したが、すぐに見つけることが難しかった。「富岡市は何県にありますか？」という教師の問いかけで群馬県内に全員の視線が向き、富岡市を探し当ててシールを貼ることができた。探し当てた瞬間は、全員で「あった！」と喜び、見つけられてほっとした表情も見られた。また富岡市の位置が地図上で点として明確になることで、東京との位置関係がより掴みやすくなったようであった。東京と富岡市の位置関係のイメージができたところで、東京から富岡市までの行き方（交通）について問いかけたところ、一番に「バス!」、「観光バス!」と生徒達が発言した。雪の生活体験の際に観光バスで富岡市を訪れたことが思い出されたようであった。他に「電車」、「自動車」、「バイク」、「飛行機」などの意見が出た。このうち、電車について、実際に3年生が電車で富岡市を訪れた話をすると、「そうなんだ」、「行ってみたい」という意見が出た。3年生が経験した活動への関心や憧れが表れた発言であった。さらに富岡市の拡大航空写真を用いて、写真の中で見つけたものを全員で出し合った。

「町」、「山」、「森」、「畑」、「細い道路」、「池」、「川」、「校庭」、「しわ」など、多くの発言があった(図IV-15)。

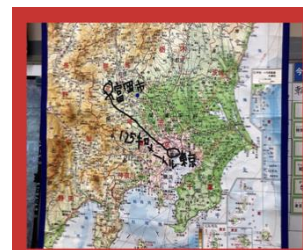
これらの発言をさらに詳細に見て確認をするために、Google Earthを活用し、生徒が発言したそれぞれの場所を拡大して見た。そして、畑にはビニールハウスがあること、「しわ」と表現をした生徒はビニールハウスの縦縞模様を見ていたこと、中央を流れる川は鏑川という名前であること、市の北側には山があることを確認した。生徒からも「畑だ!」、「(川が)流れている!」、「学校とかもある」など、さらに発見することの喜びが感じられる発言が出てきた。さらに畑に焦点を当て、富岡市で育てられている農産物を考える活動に取り組んだ。生徒はロイロノートアンケートカードを用いて、富岡市で有名な農産物を考え、回答をした。各自がアンケートに回答した後、集計結果を画面に示すと「え?」、「(自分と)違う!」など、自分と他者の回答を比べている様子が見られた。その後、富岡市の有名な農産物である下仁田ねぎについて学習をした。下仁田ねぎと白ねぎの実物を見たり触れたりして、それぞれの特徴について言葉で表現した。「太さと長さが違う」、「下仁田ねぎの方が太い」、「長いのは普通のねぎ」などの発言が出された。2種類のねぎを比べながら発言をしている様子が見られた。また畑の様子に着目し、川沿いの場所にあること、粘り気のある土がねぎの生育に良いこと、ねぎの他に「こんにゃくいも」もたくさん育てられていることを確認した。最後に、学習したことの中で、自分が分かったこと、印象に残ったこと、さらに調べてみたいことをまとめる活動を行った。各生徒がロイロノ



図IV-15 地図からの読み取り

図IV-16: A classroom scene where students are gathered around a large map on the wall, looking at it intently. A teacher is also present, pointing at the map. The map shows the location of Utsunomiya City in Gunma Prefecture.

図IV-16 写真を用いた表現

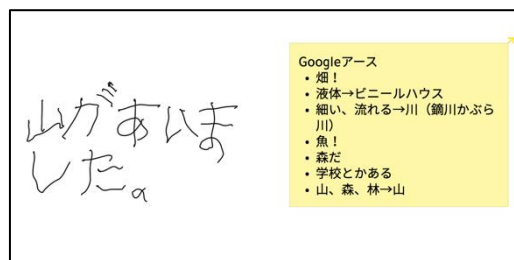


図IV-17 ロイロノートのまとめ

トを用いてこれまでの学習の内容を振り返りながら、トピックを一つ選び、まとめた。富岡市の地図上の位置、下仁田ねぎ、Google Earth で発見したものなどをトピックとして、文字、画像、音声、イラストなどでカードにまとめる様子が見られた(図IV-16、図IV-17)。授業後に感想を尋ねたところ、「自分が知っていることが出てきてよかった。」、「たくさんのことを勉強できて、面白かった。」という声が挙がった。

【社会的な事象を捉えるための教材】

本単元では、社会的な事象を自分のこととして捉えるための基礎として、まず自分自身で見つけたもの、気づいたこと、感じたことを言語化する、文字や写真、絵などでまとめ、表現することを重視した。そして生徒から出た表現と社会的な事象(事実)と結びつけることで、学習を進めた。まず自分自身で見つけたり、気付いたりするきっかけとして、地図を用いた。抽象的思考に課題を持つ知的障害生徒にとって、地図を用いて社会的な事象を捉えるためには教材の工夫が必要であると考えた。一つは、大判地図のみだけでなく、航空写真、Google Earth など、複数の地図教材を用い、全体(関東地方、群馬県)から部分(富岡市)への焦点化を丁寧に行うことであった。特にGoogle Earth は、山林や川、細かい建物まで、画像として拡大できるため、地図で各生徒が発見したものを具体的に確認することができた。もう一つは、実際にみんなで指をさしたり、言葉にしたりするなど、集団で地図に触れるということであった。友達が行っていることへの関心が高い集団の特性を踏まえ、みんなで同じ地図に触れることで、「そこ、畑かなあ?」、「これ、学校じゃない?」などのやりとりが出てきた。このようなやりとりによって、全員が活動に参加しやすい状況が生まれ、全員の生徒から多くの発言が出た。次に生徒が学習したことを振り返り、まとめる場面において、ロイロノートを活用した。各生徒のノートには、スライドの資料が共有され、振り返りやまとめの際に閲覧をしてトピックを選ぶ様子が見られた。また授業中における生徒の発言を教師が文字化し、まとめの時間に生徒に共有をした。このカードを使って、自分の印象に残ったことを振り返ってまとめた生



図IV-18 記録による振り返り

徒もいた(図IV-18)。ロイロノートが、自分達で経験したことや考えたことを整理したりまとめるための手段の一つになることが期待される。今後は、生徒間でも共有をすることで、お互いが考えたこと、調べたことなどを学び合う機会に発展できればと考える。

②その他の場面

実物を用いて、比較をしながら特徴を言葉にした下仁田ねぎについて、生徒の関心が高かった。富岡市の地形(鑓川の流れ)による小石を含んだ粘土質の土壌で下仁田ねぎがたく育つことに関心を持つ生徒もいた。また煮ることによって、甘くとろりとした柔らかい風味が出ることから、鍋料理にするととても美味しいことを伝えると、生徒たちから「美味しそう」、「食べてみたい」という声が挙がった。そのため、家庭科の学習で、群馬県の郷土料理「おっきりこみ」の調理実習を企画した。材料について「下仁田ねぎを入れたい」という意見が出された。それぞれの教科につながる今回の学習経験を通して、自分達が普段食べているものがどこでどのように作られているかを調べたり、また食材の特徴を活かした調理方法といった食への関心が高まったりすることなどにつながっていくことを期待している。

(文責：若井広太郎、仲野みこ)

3) 高等部2年の授業実践

学部・年/組	教科等	時数(想定)	実施時期	作成者
高等部2年	社会	6	1月	飛田

1. 単元名

日本の世界遺産・文化遺産

2. 単元の構想

(1)	学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	学習には意欲的に取り組むが、自信のなさから授業中の発言には消極的になってしまう生徒もいる。実際に見る、触れる、操作する、体験するなどの仕掛けを用意することで興味関心が高まり、気づきや理解を促したり、発言を引き出ししたりすることができる。
(2)	学習活動・教材 (単元・題材観)	世界遺産の意義や必要条件について理解を深めると共に、生徒が見聞きしたことがある「富士山」「端島炭坑(明治日本の産業革命遺産)」について地図や年表、歴史的資料などを読み取ることで、世界遺産に選定された理由に気付くことができるようにする。1月に見学する世界遺産「富岡製糸場」については、主に富岡製糸場の建物に施された先人たちの知恵と工夫、特徴に注目しながら、世界遺産となった理由に気付くことができるようにする。
(3)	単元の意義・展望 (指導観)	本単元で取り扱った富士山、端島にはその他の構成資産があること、また、富岡製糸場も「絹産業遺産群」として「荒船風穴」や「高山社」など共に世界遺産に登録されている資産があることを知り、それらに興味をもち、近代産業の発展について3年生で学習することへの見通しをもつとともに、他の日本の世界遺産に興味をもって訪れたり、調べたりして興味関心が広がることを期待したい。

3. 単元目標(単元全体に関わる内容)

単元を通して目指す子どもの姿		
世界遺産を、地図、写真や歴史的資料などを基に調べ、世界遺産となった理由をまとめることができる。		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
①【オ(イ)⑦高等部1段階】	②【オ(イ)④高等部1段階】	③【ウ高等部1段階、2段階】

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
1	世界遺産「富士山」	2	1 「世界遺産」の定義を知る。 2 富士山の地理や地形を地図や Google Earth で確認し、印を付けたり、気付いたことを発表したりする。 3 富士山の周りの神社の数、富士山を題材とした錦絵などを確認する。 4 富士山が「信仰と芸術の山」として世界遺産となったことを知る。
2	世界遺産「端島炭坑」	2	1 端島が軍艦島といわれる由来を確認する。(写真、Google Earth) 2 軍艦島がなぜ作られたのか動画やグラフを基に知る。 3 端島(軍艦島)は世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の1つであることを知る。
3	世界遺産「富岡製糸場」	2	1 富岡製糸場の外観や建物内部の写真を見て、何があるか気付いたことを挙げ、なぜそうになっているのか予想し、資料を読み取ってわかったことをまとめる。 2 実際の見学を通して分かったことや、ガイドの話から聞き取ったことをまとめる。 3 世界遺産になった理由をワークシートに記入したことや写真、資料から見付け、共有する。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度
①我が国の歴史上の主な事象を手掛かりに、関連する先人の業績、優れた文化遺産などを理解している。	②世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、我が国の歴史上の主な事象を捉え、世の中の様子の変化を考え、表現しようとしている。	③社会に主体的に関わろうとする態度や、より良い社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土に対する愛情、我が国の歴史や伝統を大切に国を畏愛する心情、我が国の産業の発展を願う我が国の将来を担う国民としての自覚や平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きることの大切さについての自覚を養おうとしている。

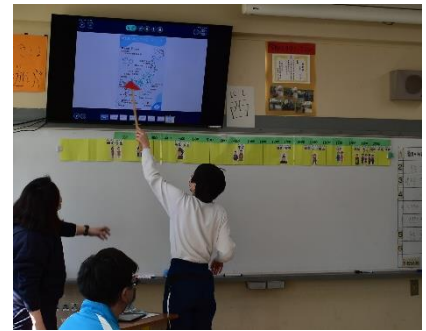
6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数:	A 概ね妥当	B 要検討()	目標設定:	A 概ね妥当	B 要検討()
題材:	A 概ね妥当	B 要検討()	教材・環境設定:	A 概ね妥当	B 要検討()

(1) 生徒の様子

①指導場面

富岡製糸場を、2年生は「世界遺産」という観点で取り扱う単元を計画した。本単元は、一次から三次まで同じ学習の流れを繰り返して取り組むことで、生徒たちが見通しをもって授業に参加し、発言する機会が増えるようにした。また、扱った世界遺産は、生徒たちが修学旅行の飛行機から見たり、小学部の頃に行ったりしたことのある「富士山」、修学旅行で訪れた「端島炭坑」、1月に訪れた「富岡製糸場」といずれも生徒たちの体験が結びつくものを設定した。二次の「端島炭坑」についての学習では、修学旅行時に「軍艦島」という通称で学んだことを、世界遺産登録の正式名称である「端島」



図IV-19 世界遺産マップの中から「長崎」を見つける姿

であることを確認した上で再度捉え直した。そのために、Google Mapの航空写真から地名を確認し、「(周りは)海!」「船で行った」など体験したことを想起しながら地理的な特徴を確認した。あわせて、「明治日本の産業革命遺産」の構成資産である三菱長崎造船所ジャイアント・カンチレバークレーンや旧グラバー住宅のあるグラバー園があることを訪問時の写真とともに地図上で確認した(図IV-19)。次に、端島炭坑で世界遺産に登録されているレンガ造りの総合案内所の4月の写真(高等部3年生が訪問時)と補修工事中の11月(高等部2年生が訪問時)の写真(図IV-20)を比較する活動では、「工事している」「新しくするため」「保存するため」と変化の理由を述べていた。これは、発言のヒントとなる写真を効果的に提示することで気づきが促されたと考えられる。



図IV-20 端島の総合案内所の比較スライド(ロイロノート)

さらに、壊れた壁の破片や護岸の写真や「なぜ壊れたのですか」という教師の問いから、「風で飛んだ」「地震でガタガタ揺れて壊れた」「高波が護岸に当たって」など壊れた理由を予想して答える姿が見られた。これは、地理的な特徴を確認したことで実生活での現象と結び付けて考えることができたと思われる。時間の経過とともに、崩れていってしまう端島に、私たちは何ができるかという問いに対して「網を設置する」「(工事のための資金を集める)クラウドファンディング」「地球温暖化(を防ぐ)」といった意見もあった。これは、世界遺産の定義として、「宝物」「守る」「未来へ引き継ぐ」というキーワードを毎時確認することで、自分ごととしてとらえ、世界遺産を維持するために「自分には何ができるのか」という思考につながったと考える。3学期に予定している単元「日本の資源～エネルギーと電力～」で地球温暖化が及ぼす影響や温暖化防止のためにできることを考え、「端島(世界遺産)を守ること」につなげることで、本単元への理解を深めたい。

②その他の場面

本単元の前に、家庭科で郷土料理・行事食の学習を行った際に「和食」がユネスコ無形文化遺産であることを学習していた。以降、給食献立表を見て、「今日は〇〇県の郷土料理ですよ」「節分の豆が楽しみ」と教師に伝えるなど食文化への興味関心に拡がりが見受けられた。生徒の中には、修学旅行で訪れた熊本城の掲示を指差し「これも世界遺産?」と尋ねる姿や東京にも世界遺産があることを伝えると「行ってみたい」と言う姿も見られた。また、同じ長崎で訪問した大浦天主堂も世界遺産であるが、端島とは違う資産として登録されていることに「なんでだろう」と疑問をもつ姿もあった。本単元の学習を終えて、新たに出てきた生徒たちの興味関心を余暇や校外学習などでさらに引き出していけるようにしたい。

(文責: 飛田真里、居林弘和)

3. まとめと今後の展望

1) 高等部3年間のカリキュラムの中で社会科の学習として育みたい力

高等部3年間でどのような力を身につけると、社会参加、社会参画へと繋がっていくのかということを中心に、特別支援学校高等部学習指導要領を参照し、年間の単元内容を、時間数などを考慮しながら精選し、配列を行なった。また、教科等横断的(コンテンツ)な視点の一つとして学校行事(特別活動)も社会科単元にカリキュラム付けている。1年ごとの繋がり、学年間の繋がりを大切に、3年間の積み上げについて立案し、施行した1年目であった。年間35時間の中でどのように単元を計画していくかについては、次年度以降さらなる精査が必要であるが、今年度についてはおおよそ計画通り取り扱った。

2) 社会的事象を様々な角度から捉えた3年間の積み上げと授業づくりについて

高等部は1月に、雪国の自然に触れ、雪の観察や実験などの雪上活動を経験すること、歴史的な世界文化遺産の見学、体験活動を通して、現代と異なる文化や風土に触れ、関心を深めることを目標とし、群馬県尾瀬岩鞍地方、富岡市を訪れる計画を立てている。野外調査活動を通して、知識や技能を習得し、学校にてより深い学びへと繋がるように思考力、判断力、表現力などを用いて考えられるようにしている。同時期に1年「富岡市について知ろう」、2年「日本の世界遺産」、3年「富岡製糸場と絹産業遺産群」とそれぞれの学年で様々な角度から学習を行ない、積み上げていくこととした。学習の内容については、各学年の「授業づくりの実際」の通りである。

高等部1年生は「富岡市について知ろう」という単元で位置や空間的な広がりに着目して、社会的事象を捉えることを目標に、群馬県、富岡市について学習を行った。2DのGoogle Map 航空写真の表示からその地域の地形について予想し、意見を出し合った後に、3DのGoogle Earthで地形が山なのか林なのか、田なのか畑なのかを視覚的に示しながらより詳しく読み取った。畑に用いられるビニールハウスに気づき、地図上の皺のようなものはなんだろうと疑問を持つ生徒がいた。畑、ビニールハウスについての知識があれば、畑と繋がったことが推察される場面であった。次に地形の特徴から収穫される農作物について考えた。生徒達がスーパーなどでよく見かけるネギと富岡市で収穫されるネギを比較することで富岡市のネギについての知識が定着したようである。今後は、生産数を示すグラフなどから農産物や特産物について考えるなど切り口を変えて社会的事象に迫るなど、生徒の実態により学習内容を精査していく必要がある。

高等部2年生は「日本の世界遺産・文化遺産」という単元で、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過に着目して社会的事象を捉えられることを目標に、日本で登録されている世界遺産・文化遺産について取り扱った。世界遺産には登録される基準があること、その世界遺産に関連する構成資産があることについて知り、今日まで保存・保護されてきた文化遺産を大切にしていかなければならないことについて学習を行った。実体験から具体的に思考や判断、表現できるような題材ということで、生徒達にとって馴染みがある富士山、産業について学習した経緯を踏まえ、高等部修学旅行で見学した長崎の「端島」、高等部体験活動で見学した「富岡製糸場」を取り扱った。本単元で取り扱わなかった世界遺産については、生徒が各々に調べ学習をしたり、余暇として家族や友達と出かけたりする機会となればと考える。また、端島や富岡製糸場に関わる近代産業の発展については、

3年時の歴史で取り扱うことを生徒達に伝える。

高等部3年生は、「我が国の歴史 富岡製糸場と絹産業遺産群」という単元で、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して社会的事象を捉えることを目標に富岡製糸場と絹産業遺産群を題材とし、明治という時代がどのような時であったのか、世の中の様子などを考えてきた。野外調査活動を実施し、資料からは想像しにくい事物を収集し、経験や体験から得たことを大切に、社会的な事象について一つずつ学習を行った。これまでの歴史の学習を踏まえることで、人の知恵や工夫を出し合って築き上げてきたことを表現できる生徒がいた。歴史という抽象度が高い学習内容であったが、見方・考え方の切り口を変える、体験してから考える、実際に触ったり、作って考えたりする教材を工夫する、伝えきれない事象については動画教材を活用するなど生徒の実態に合わせて学習を進めることで、興味関心を持ち、自分たちの生活と照らし合わせ、身近に感じることができるようになってきたのではないかと考える。しかし、自分たちの生活に置き換えて考えるという視点までは迫ることができなかった。

3) 社会的事象を捉えるための教材の工夫

単元ごとに問題解決的な学習過程（つかむ・調べる・まとめる）を組み込み、生徒自身が問題意識をもって取り組めるような構想とした。単元として問題解決的な学習過程にする構想では、積み上げが難しい生徒もいるため、毎時完結するような構想とし、学習の流れはほぼ同じとした。

- ・位置や空間的な広がりに着目し、社会的事象を捉えるために、3学年が共通して用いた教材として、2DのGoogle Map 航空写真表示からその地域の地形について予想し、意見を出し合った後に、3DのGoogle Earthで地形の高低差や山なのか田なのか畑なのかを視覚的に示しながらより詳しく読み取った。生徒からの予想を引き出しやすく、発言からの確認を生徒と一緒に行うことができることから、生徒達にとって有効な教材であった。

- ・時期や時間の経過に着目して社会的事象を捉えるために、年表を作成し、年表に示す各時代区分の色を変え、時代の長さを捉えやすくした。学習した項目ごとに時代や人物を整理したり、発明した人たちの国を国旗で添えたり、当時の道具の写真を生徒と確認しながら貼り付けたりする活動を繰り返し行うことで、時間の経過を確認できる生徒が増えた。

- ・事象や人々の相互関係に着目して社会的事象を捉えるために、歴史上の人物を取り扱い、その時代の特徴を捉えることとした。

4) 学習評価の方法

高等部では、3学年が共通して、授業展開、評価する手段として毎時ロイロノートを活用してきた。教師が授業中の生徒の発言をテキストカードに入力し、一覧やベン図で示すこと、毎時のまとめの時間に生徒が授業で印象に残ったことを個々に応じたやり方（テキスト入力、手書き文字、録音など）で記録し、共有することで、自分の意見を授業中に即時振り返って再認識したり、友達の意見との共通点・類似点、差異に気づけるようにしたりした。ロイロノートはネット上にデータが保存されるため、IDを家庭と共有することで、インターネット環境があれば生徒がいつでも閲覧することができる。好きな時にその日の授業を振り返ることができるツールであり、学習してきたこと

の記録となった。

教師は、生徒が記録を作成する段階から助言することで内容を深めたり広げたりすることや、たとえ問いの答えに辿り着かなくても、生徒の気づきや、どのように学習に取り組もうとしていたのかという学びに向かう態度を即時評価すること（時間における評価をすること）ができた。また、先に述べたようにロイノートはネット上で電子化されたファイルを用いる仕様のため、蓄積された学習履歴の管理を容易にするだけでなく、授業で用いる資料や生徒から提出されたデータを共有すること、前時のまとめデータを活用して次時の授業準備をすることなど、教師の負担を軽減することができた。

5) 次年度に向けて

知的障害のある生徒が社会的事象を自分ごととして捉え、社会参加・社会参画していくためにどのような内容を学習し、積み上げていくと良いのか、社会科の年間 35 時間という枠組みの中で精査すると共に、指導方法や教材を蓄積していくことが必要である。また、在籍する生徒や学校・学部の特徴を踏まえ、学校全体や学部全体、学年における年間のつながり、他教科との関連を考慮しながら教育課程全体で取り組んでいくこと、全校でカリキュラムマネジメントに取り組むことが必要であろう。既習を生かした成果については、次年度以降の社会科の経過を追うとともに、中学部との繋がり、6年間の学習の積み重ねといった視点も大切に次年度研究を進めることとする。また、評価については、形成的な評価としてポートフォリオ評価、ルーブリック評価、振り返りシートなど様々な方法を用いて評価してきた。今年度の評価の成果を検証し、次年度以降の指導と評価の指針としていきたい。

(文責：山口裕紀子 石飛了一)

【文献】

文部科学省(2017)小学校学習指導要領解説 社会編 平成 29 年 7 月.

文部科学省(2017)中学校学習指導要領解説 社会編 平成 29 年 7 月.

文部科学省(2018)特別支援学校学習指導要領解説 各教科編小学部 平成 30 年 3 月.

文部科学省(2018)特別支援学校学習指導要領解説 各教科編中学部 平成 30 年 3 月.

文部科学省(2019)特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編上高等部 平成 31 年 2 月.

澤井陽介・唐木清志(2021)小中社会科の授業づくり 社会科教師はどう学ぶか. 東洋館出版社.

筑波大学附属大塚特別支援学校(2022)研究紀要. 第 66 集.

(文責：石飛 了一、北村 洋次郎、若井 広太郎、仲野 みこ、居林 弘和、飛田 真里、山口 裕紀子、澁谷 高伸)